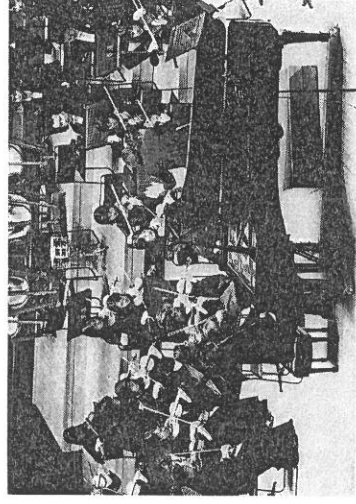


▼東京ニューシティ管弦楽団十イェルク・デームス
(©林書代様)



◆東京ニューシティ管弦楽団 第一五回定期演奏会

指揮の内藤彰が率いる東京ニューシティ管弦楽団は、今年で創立11年目、東京で10番目のプロ・オーケストラ。このオケは、幅広い分野にわたって活動しており、なかでもオペラやバレエの伴奏には定評がある。

ベートーヴェンの「レオノーレ」序曲第3番では、コンビネーションの良さが非常に際立っていた。このオケの持ち味をプログラムの冒頭に発揮させる演出は、なかなか心憎い。続いてベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番。ウィーンの巨匠イェルク・デームスがソリストをとめた。彼の掌中にはこの作品はしみ込んでおり、貫禄ある演奏で、ロマン主義的なテンポの振幅の大きい演奏に合わせるべくオケは努めていたが、時として掛け合いのぎこちなさを感じられた。ブラームスの「交響曲第4番」では、内声部の隠れた旋律へのアプローチの不足と管楽器群の弱さが露呈された。全体的に纏まりもあり熱演であった。一方で、各楽器群のつり合いが今後の大きな課題となろう。(4月6日、東京芸術劇場)

(道下京子)

「音楽の友」2000年6月号

●東京ニューシティ管弦楽団

これまでオペラ、バレエを中心に活動し、北びあ(王子)で年2回の定期演奏会を開いてきた東京ニューシティ管弦楽団が、今春より定期を年5回に増やした。その最初の公演を聴く。レオノーレ序曲第3番、イェルク・デームスを迎える「皇帝」、ブラームスの交響曲第4番で、指揮は常任の内藤彰。

弦楽器セクションの一部から細身の響きが紡がれたものの、全体的には新たな門出にふさわしい空気の高い演奏が繰り広げられたといえる。これまでオペラや音楽・合唱曲で力をもったタクトを披露してきた内藤彰も、奇をてらることなく、堅実なペース配分を心がけていたようだ。オーケストラも懸念で、ブラームスの第5楽章終盤と感興あふれる楽の音を披露。フィナーレでも緊張感を失くまいという意欲を見せた。内藤と東京ニューシティ管はアンコールのハンガリー舞曲第3番とリリックスした燃焼を聴かせ、会場を沸かせている。刀威のテーマによる「皇帝」がコンサートの一つの頂点を築いた。淡々と弾き進んでいくが、決して平板なピアノにはない。それどころか、音色へのこだわり、そして語り口のままに際立つ。古典志向は聴きとれるが、断つてやむは「皇帝」ではなかった。(4月6日、東京芸術劇場) 飯田佳博